

# アメリカ文学史

付・主要作家作品解説

---

---

A Survey of American Literature

---

---

著 者

中 村 英 一  
加 藤 道 夫  
唐 澤 恪  
福 田 立 明  
丹 羽 隆 昭

THE SIGN OF  A GOOD BOOK

英 宝 社



## は し が き

現在までに「アメリカ文学史」と名のつく本、あるいはそれに類する書は、わが国に限っても相当数のものが出版されているが、今回われわれもささやかな「アメリカ文学史」を世に問うことになった。先輩諸氏の数多くのすぐれた本が出まわっているのに今更という気もしないではないが、現在の大学における「アメリカ文学史」という講義科目を念頭において考えるとき、大なり小なりの不満を感じざるをえない。もちろんすべてに眼をとおしたわけでもなく、学生に教科書または参考書として数種類の本を利用させた経験しかなく、しかもそれらを十分に使いこなせなかった自分の非力を棚に上げていうのもおかしな話かもしれない。しかし、たとえば「アメリカ文学史」という講義科目の設置状況を考えてみると、4年制大学で3年次もしくは2年次に設置されていたり、短期大学にいたっては1年次に設置されているところさえ見うけられるようで、このような現状をふまえていけば、「アメリカ文学史」の講義に要求されるのは、入門としてのそれであり、決して該博な高度な専門的な知識ばかりではないはずである。われわれの今回の試みは、上記の要求に答えるべく、主要作家については若干の作品の内容紹介を含めて、重点的に整理し論考したものである。

執筆者一同、数回にわたって会議を開き検討した結果、従来の「アメリカ文学史」と特に変わった視点を設けるわけではないが、

1. アンソロジー的機能をもたせること

2. 単独項目で記述する作家については、その主要作品(10点程度)を、見出しの作家名の下にまとめて記載すること

の2点が提案され了承された。その他表記上の問題など、細々した事項が討議に付されたが、文体は各執筆者の考えを尊重することとし、人名・作品名は原則として英語表記にすること、地名はカタカナ書きにすることぐらいの統一にとどめた。また各章の冒頭には「概観」という項目を設けることにしたが、これも各執筆者の意向によって、時代思潮・時代背景・文学状況などといった自由な視点から書いてもらった。本来なら統一した観点からのものが望ましいかもしれないが、この方がそれぞれの章が取り扱っている時代の特徴をも暗示することになり、あえてこのような形で提示することにした。

本書の構成は、「アメリカ文学史」本体にあたる第一部と、「主要作家作品解説」の第二部、ならびに第三部の年表の三部構成になっている。第一部の執筆担当は次のとおりである。

第一章 唐澤 恪

第二章 丹羽隆昭

第三章 加藤道夫

第四章 福田立明 (劇) 中村英一

第五章 中村英一 (詩) 丹羽隆昭 (批評) 福田立明

なお、「批評」の項目は、本来なら第四章・第五章に分割して論述すべきかもしれないが、「批評」というジャンルが確立したのも比較的新しいし、従って「批評史」として利用できる便も考え、第五章の末尾におくことにした。第二部の「作品解説」は、学生の読書指導の一助にもと考えて付したもので、全体で30人の主要作家を選び出し、彼らの著作の中から適当な一作品を選定し、内容紹介を中心に記述した。またそれぞれ例文を付けてアンソロジーの役割をも果たせるようにした。作品の選定については執筆者に一任することにし、本文の記述との関連もあり必ずしも代表作にこだわらないことにした。また解説した作品の原書および翻訳書を付記して、原作を読みたいと思う学生の便をはかることにし、これも学生の利用という観点から、できるだけ廉価版を中心に記載した。なお、「年表」の作成には丹羽隆昭があたり、「作品解説」の執筆担当は目次に明記してある。

十分に準備のための時間を取ったつもりでいたが、結局は時間不足になり、数多くの不備な点が見られることと思う。今後の示唆を期待しお願いする次第である。あわせて英宝社編集部の種々のご配慮に感謝する。

1988年4月15日

中村英一

## 目 次

はしがき	iii
第一部 文学史	1
第一章 植民地時代から19世紀初期まで(1607-1829)	3
I. 概 観	3
II. 移住記録から政治文書まで	5
1. 探険・移住の記録	5
2. 植民地事情報告	7
3. 日記・自伝	8
4. 宗教書・政治文書	10
5. 主要作家	12
(1) Cotton Mather (2) Jonathan Edwards (3) Benjamin Franklin	
III. 詩	17
1. Edward Taylor	19
2. Philip Freneau	20
3. William Cullen Bryant	21
IV. 小 説	22
1. Charles Brockden Brown	23
2. Washington Irving	24
3. James Fenimore Cooper	26

第二章 ジャクソニアン・デモクラシーの時代から南北戦争まで (1829-65) . . . . .	28
I. 概観——時代状況と思潮 . . . . .	28
II. 詩, 随筆, 評論 . . . . .	31
1. 超越主義者たち . . . . .	31
(1) Ralph Waldo Emerson (2) Henry David Thoreau (3) Walt(er) Whitman	
2. 保守主義者たち . . . . .	38
(1) Henry Wadsworth Longfellow	
3. その他の詩人たち . . . . .	41
(1) Edgar Allan Poe (2) Emily Dickinson (3) John Greenleaf Whittier	
III. 小 説 . . . . .	46
1. Nathaniel Hawthorne . . . . .	47
2. Herman Melville . . . . .	50
第三章 南北戦争後から第一次世界大戦まで (1865-1914) . . . . .	53
I. 概観——時代背景 . . . . .	53
II. 小 説 . . . . .	56
1. 地方色作家 . . . . .	57
2. Mark Twain . . . . .	60
3. William Dean Howells . . . . .	62
4. Hamlin Garland . . . . .	65
5. Stephen Crane . . . . .	66
6. Frank Norris . . . . .	68

## 目 次

vii

7. Theodore Dreiser . . . . .	70
8. その他の自然主義作家たち . . . . .	73
9. 「暴露作家」 . . . . .	74
10. Henry James . . . . .	75
11. Henry Adams . . . . .	78
12. Edith Wharton . . . . .	80
13. Willa Cather . . . . .	80
14. Ellen Glasgow . . . . .	81
15. その他の作家たち . . . . .	81
16. Gertrude Stein . . . . .	83
III. 詩 . . . . .	85
1. Edwin Arlington Robinson . . . . .	86
2. Robert Frost . . . . .	87
3. Edgar Lee Masters . . . . .	87
4. Vachel Lindsay . . . . .	88
5. Carl Sandburg . . . . .	89
第四章 二つの世界大戦の間 (1915-45) . . . . .	90
I. 概 観 . . . . .	90
II. 小 説 . . . . .	95
1. Sinclair Lewis と Sherwood Anderson . . . . .	96
2. F. Scott Fitzgerald . . . . .	98
3. Ernest Hemingway . . . . .	99
4. John Dos Passos . . . . .	101
5. William Faulkner . . . . .	102

6.	Thomas Wolfe と南部作家	104
7.	John Steinbeck	107
8.	Saroyan, その他の 30 年代作家	108
9.	プロレタリア文学	109
10.	H. Miller, N. West, 40 年代の作家	110
III.	詩	112
1.	Ezra Pound	114
2.	Thomas Stearns Eliot	114
3.	女流詩人	116
4.	William Carlos Williams	117
5.	Wallace Stevens	118
6.	e. e. cummings と Hart Crane	119
7.	フュジティヴ・グループ (Fugitive Group)	120
8.	モダニズム変容期の詩人	121
9.	黒人詩人	122
IV.	演 劇	123
1.	Eugene G. O'Neill	125
	第五章 第二次世界大戦以後 (1945- )	127
I.	概 観	127
II.	小 説	128
1.	南部作家	128
	(1) Truman Capote (2) William Styron	
2.	黒人作家	132
	(1) Ralph Ellison (2) James Baldwin	



3. ユダヤ系作家 . . . . .	135
(1) Norman Mailer (2) J. D. Salinger (3) Saul Bellow (4) Bernard Malamud (5) Philip Roth (6) Joseph Heller	
4. 1960年以後の文学状況 . . . . .	143
(1) John Updike (2) John Barth (3) Kurt Vonnegut	
III. 詩 . . . . .	149
1. モダニズム系統の詩人たち . . . . .	150
2. 反モダニズムの詩人たち . . . . .	152
3. その他の新しい詩人たち . . . . .	154
IV. 演 劇 . . . . .	154
1. Tennessee Williams . . . . .	157
2. Arthur Miller . . . . .	158
3. Edward Albee . . . . .	159
V. 批 評 . . . . .	160
1. ニュー・ヒューマニストとラディカリスト . . . . .	160
2. マルクス主義的批評 . . . . .	161
3. ニュー・クリティシズム . . . . .	162
4. シカゴ学派 . . . . .	162
5. 折衷派の主要批評家 . . . . .	163
6. Northrop Frye とポスト・ニュー・クリティシズム . . . . .	164
(1) 歴史主義批評／思想史的批評 (2) ネオ・マルクス主義批評 (3) 修辞学的批評 (4) 言語学／文体論／記号論的批評 (5) 解釈学的批評 (6) 精神分析学的批評 (7) 現象学的批評 (8) フェミニスト的批評 (9) 構造主義／ポスト構造主義批評	

第二部 主要作家作品解説 . . . . .	169
1. C. B. Brown, <i>Arthur Mervyn</i> (唐澤) . . . . .	170
2. R. W. Emerson, “Self-Reliance” (丹羽) . . . . .	172
3. N. Hawthorne, <i>The Scarlet Letter</i> (丹羽) . . . . .	174
4. E. A. Poe, “The Fall of the House of Usher” (唐澤) . . . . .	176
5. H. D. Thoreau, <i>Walden</i> (丹羽) . . . . .	178
6. H. Melville, <i>Moby-Dick</i> (福田) . . . . .	180
7. W. Whitman, “Song of Myself” (丹羽) . . . . .	182
8. E. Dickinson, “A Route of Evanescence” その他 (加藤) . . . . .	184
9. M. Twain, <i>Adventures of Huckleberry Finn</i> (加藤) . . . . .	186
10. H. James, <i>The Ambassadors</i> (加藤) . . . . .	188
11. S. Crane, <i>The Red Badge of Courage</i> (加藤) . . . . .	190
12. T. Dreiser, <i>Sister Carrie</i> (唐澤) . . . . .	192
13. R. Frost, “Stopping by Woods on a Snowy Evening” (丹羽) . . . . .	194
14. S. Anderson, <i>Winesburg, Ohio</i> (福田) . . . . .	196
15. T. S. Eliot, <i>The Waste Land</i> (福田) . . . . .	198
16. E. O'Neill, <i>Long Day's Journey Into Night</i> (中村) . . . . .	200
17. F. S. Fitzgerald, <i>The Great Gatsby</i> (丹羽) . . . . .	202
18. W. Faulkner, <i>Absalom, Absalom!</i> (福田) . . . . .	204
19. E. Hemingway, <i>The Sun Also Rises</i> (福田) . . . . .	206
20. V. Nabokov, <i>Lolita</i> (福田) . . . . .	208
21. J. Steinbeck, <i>The Grapes of Wrath</i> (加藤) . . . . .	210
22. R. Wright, <i>Native Son</i> (福田) . . . . .	212
23. T. Williams, <i>The Glass Menagerie</i> (中村) . . . . .	214
24. B. Malamud, <i>The Fixer</i> (中村) . . . . .	216
25. S. Bellow, <i>The Adventures of Augie March</i> (中村) . . . . .	218

目 次

xi

26. A. Miller, <i>Death of a Salesman</i> (中村)	220
27. J. D. Salinger, <i>The Catcher in the Rye</i> (中村)	222
28. J. Baldwin, <i>Go Tell It on the Mountain</i> (加藤)	224
29. J. Barth, <i>The Floating Opera</i> (中村)	226
30. P. Roth, <i>Goodbye, Columbus</i> (加藤)	228
第三部 年 表	231
人 名 索 引	245
著 作 索 引	251



# 第一部 文 学 史



# 第一章 植民地時代から19世紀初期まで (1607-1829)

## I. 概 観

植民地時代から独立戦争(1775-83)の時代にかけてのアメリカ文学の主体を成すのは、狭い意味での文学作品ではない。探険・移住の記録、植民地事情の報告、日記・自伝、宗教的著作、政治的文書などである。これらと比べて影はうすいが、詩や劇が書かれなかったわけではない。代表的な詩人としては、Edward Taylor (1642?-1729) や Philip Freneau (1752-1832) の名をあげることができる。劇の面では、1767年に Thomas Godfrey (1736-63) の *The Prince of Parthia* が専門スタッフによって上演されている。

しかし、文学的創作がアメリカ文学史の前景に大きく現われるのは、独立戦争後のことである。この時期のアメリカでは、憲法発効による国家的基礎の確立、ルイジアナ購入による領土の拡大、その後の西部開発の推進、第二次対英戦争を契機とする経済的自立の進行、といった経過を経るなかで、ナショナリズムの台頭がみられたが、これと呼応して文学的独立の気運も起ころはじめた。この意欲は Connecticut Wits と呼ばれる詩人グループにおいて最も顕著であった。Freneau は文学的独立ということを強く意識しなかったが、この時期に詩境を深めていき、少しあとの William Cullen Bryant (1794-1878) とともに、アメリカの文学的独立を実質的に推し進めた。劇では、Royall Tyler (1757-1826) の喜劇 *The Contrast* (1787) や William Dunlap (1766-1839) の数多くの作品がある。ただし、本格的な演劇の出現は、20世紀まで待たねばならなかった。

この時期の、アメリカ文学史上特に重要な出来事は初期小説群の出現である。「アメリカ最初の小説」とされる *The Power of Sympathy* (1789) を William Hill Brown (1765-93) が匿名で出版したあと、1820年までには100編前後のアメリカ人による小説作品が出版されている。まさにアメリカ初期小説開花の時代であった。文学的価値の低い作品が多いとされるが、考察に値するものもかなりある。特に Charles Brockden Brown (1771-1810) の数編の小説は、「アメリカ文学の父」の名を辱めないパワフルな作品である。1820年代には、

小説の出版はさらに盛んになり、すでに1800年代に創作活動を開始した Washington Irving (1783-1859) の本格的な物語集や、「アメリカ小説の父」 James Fenimore Cooper (1789-1851) の連作 'Leather-Stocking Tales' 中の3編が出版されるなど、アメリカ小説は急速に豊かさを増していった。以上のような19世紀初期までのアメリカ文学の流れの背景を成す思想的な展開について、次にその大略を述べておきたい。

アメリカは、植民地設定期から宗教的に多様であった。それぞれの植民地の中心勢力を成す教派は、イギリス国教会派(ヴァージニア)、分離派(プリマス)、ピューリタン(マサチューセッツ湾植民地)、クエーカー教派(ペンシルヴァニア)、ローマ・カトリック教会派(メリーランド)などさまざまだった。しかし、17世紀のアメリカを最も強く支配し、その後のアメリカ人の精神に決定的な影響を残すことになったのは、ピューリタン、分離派、およびイギリス国教会派が吸収した教義、カルヴィニズムであった。人間の全面的墮罪、神の無条件的選択、キリストによるあがないの限定、恩寵(めぐみ)の不可抗力性、そして聖徒の堅忍を強調するこの教義の典型的な表現が、いわゆるニューイングランドのピューリタニズムであり、ピューリタンたちの入植初期の、政教一致的な社会統治、つまり神政政治の一応の確立を頂点とするピューリタニズムの全盛とその後の衰退の過程が、17、18世紀のアメリカ精神史の主筋を成すといえよう。

ニューイングランドでは、入植の第二世代にはすでに教会の支配力の弱화가始まっていたが、17世紀末にはイギリスの信教自由令の発布(1689)や科学革命の影響などが社会の宗教的基盤をおびやかした。最大の挑戦は、自然に真理の源泉を求め、その理解の具としての理性を強調する啓蒙思潮だった。もともとピューリタンたちは、啓示以外の事に関しては理性を尊重する立場をとっていたが、啓蒙思潮では啓示に代わるものとしての理性が強調されていた。この挑戦への対応が、18世紀アメリカの重要な諸現象となって現われる。一方においては 'natural philosophy'、つまり自然科学の発達がみられた。他方において——ヨーロッパにも類似の現象が起きたが——啓蒙思潮の衝撃は「大いなる覚醒」と呼ばれる宗教意識の高揚を喚起する大きな原因となった。1730年代にニューイングランドに始まり、全植民地にひろまったこの現象は、独立戦争の時期まで断続的に続いたが、宗教を大衆化するとともに、ニューイングランドの会衆派教会を、感情的な宗教体験を重視する「ニュー・ライト」派と理性にかなう宗教を主張する「オールド・ライト」派に分裂させるなど、諸派教



会の分化をひき起こした。

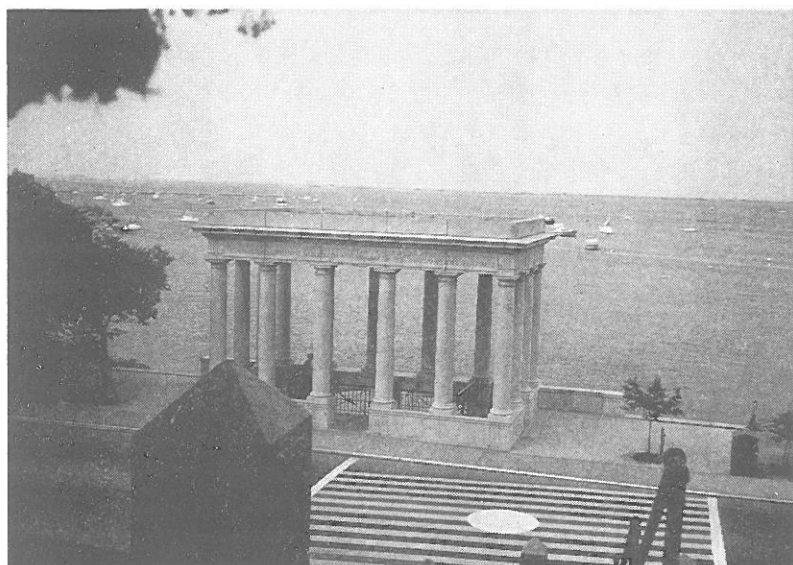
「オールド・ライト」派は、人間の自由意志を尊重し、万人救済を説く、反カルヴィニズム的なアルミニウス主義の影響を受けており、理性主義的でリベラルな傾向をもっていた。ユニテリアニズムにおいてはこれらの傾向が特に強調された。キリストの神性を否定し、唯一の神格を主張するこの教義は、啓蒙思潮の影響下に、アメリカでは1780年代から勢力を得、のちには超越主義の呼び水ともなった。ユニテリアニズムやこれと近縁性をもつユニヴァーサルイズムの一源泉として、科学革命と啓蒙思潮の申し子ともいべき理神論がある。被造物としての世界の合理的な説明をめざしたこの思想は、しだいに自然宗教的な性格を深めつつ、1800年代頃まで多くのアメリカの知識人の心をとらえていた。建国の父たち——彼らの多くが、同じく啓蒙思潮のもたらした革命の思想とともに、この理神論を信奉したのであった。

独立戦争後、正統信仰からの解放が一層進んでいくようだった。国家宗教は制定されず、権利章典によって信教の自由が保障された。だが、一方では独立後まもなく、フランス革命の過激化に対する反発も手伝って、国家主義的フェデラリズムが政治家の間に台頭するという状況の中で、1795年にはその後1835年頃まで続く宗教復興運動が起こっていた。そして Connecticut Wits はカルヴィニズムを執拗(とこ)に擁護し続けていた。ピューリタニズムはまた、世俗的な道徳の中でも生き延びていた。たとえば、アメリカの初期小説の性格は、文芸へのピューリタンの抑圧ということを抜きにしては理解し難いであろう。これは初期小説に限ったことではないが。

## II. 移住記録から政治文書まで

### 1. 探険・移住の記録

アメリカ文学史の冒頭を飾る著作としては、Thomas Hariot (1560-1621) の *A brief and true report of the new found land of Virginia* (1588) や、Captain John Smith (1580-1631) の *A True Relation of . . . Virginia* (1608), *A Description of New England* (1616) など、イギリス人による調査・探険の記録があげられる。Hariot の本は、結局失敗に終わったノースカロライナのロアノーク植民地についての魅力的な報告であった。Smith はジェイムズタウン植民地の設立を助け、また「ニューイングランド」の呼称を初めて用いた探険家で、その著



Plymouth Rock (メイフラワー号の到着地点)

作は、冒険談的粉飾もこらされているが、当時絶好の新世界紹介の書とされた。

移住者自身による移住記録としては、第一に William Bradford (1590-1657) の *Of Plymouth Plantation* (1856) があげられるだろう。第一部では、分離派の歴史、そしてその一団がオランダへの移住後メイフラワー号で「ニュープリマス」に到着するまでの経緯が、第二部では、編年体で 1620 年から 1646 年までのプリマス植民地の実情が述べられている。1621 年から 1656 年にかけて 5 年間を除くすべての期間総督をつとめた Bradford は、入植当初から頻発した紛糾、意外に早くからみられた植民地の衰微の兆しや人間悪の発現など、多くの問題に指導者として対処しなければならなかった。こうした経過を含め、すべてを Bradford は真実を重んずる「平明な文体 (plain style) によって」記述しようとしている。誠実かつ剛健な Bradford の人柄をしのぼせるこの記録は、神の僕(しもべ)としての自覚と万象に神意の働きを見る深い信仰に貫かれている。

ニューイングランドの初期の事情についての史料として、Bradford のこの著作と双璧をなすのが、マサチューセッツ湾植民地の初代総督 John Winthrop (1588-1649) が 1630 年、マサチューセッツに向かうアーベラ号上で書き始め、

以後終生断続的に書き続けた日記、すなわち *The History of New England* (1825-6) である。Winthrop は何度も総督に選ばれ、また教会の長老をつとめた。マサチューセッツ湾植民地の神政政治の中心人物で、無律法主義者 Anne Hutchinson (1591-1643)、急進的な分離主義者 Roger Williams (1603?-83) の追放や、1643 年の「ニューイングランド連合」の結成などによっても知られる。この日記で彼は、自らを「総督」などと呼ぶような客観的な筆致によって、神聖なる「丘の上の町」(a City upon a hill) の大小の出来事を記録し、政治、経済の諸問題にも触れている。諸々の経過に神意の働きを見る態度は、Bradford と共通している。

## 2. 植民地事情報告

Bradford や Winthrop の著作、さらにはイギリス国教徒 Thomas Morton (1590?-1647) の *New English Canaan* (1637) を通じて、ニューイングランド植民地の初期の様相について多くを知ることができる。Morton の本では、のちに Nathaniel Hawthorne (1804-64) が “The May-pole of Merry Mount” (1836) で扱う、メリーマウント植民地とプリマス植民地との紛争のてんまつを記す第三部が興味深い。また、William Wood (生没年不明) の *New Englands Prospect* (1634) はニューイングランドの動植物やインディアンについてのすぐれた紹介書であった。

初期の最も包括的な植民地事情紹介の書は、しかし、南部からあらわれた。Robert Beverley (1673?-1722) の好著 *The History and Present State of Virginia* (1705, 1722) である。整然とした4部構成で、ヴァージニア植民地の政治史、自然資源、インディアンの生活風習、植民地の政治的、社会的現状が、周到に点検されている。Beverley がインディアンを、ヨーロッパ人の到来により幸福と純真を奪われた「無害な民」、とみなしている点が興味をひく。Beverley の妻の兄弟で、Beverley と同じくヴァージニア生まれの William Byrd II (1674-1744) の *The History of the Dividing Line . . .* (1841) も重要な報告的文書である。Byrd は日記作者として有名だが、数編の調査旅行記録によっても知られる。この *History* はそれらの一つで、ヴァージニアとノースカロライナの境界決定 (1728) を指揮した Byrd が、その折の観察を日記体で記録したものである。辺境の生活、その動植物相、そしてインディアンの生活風習が軽妙な筆致で描写されている。

その後のアメリカ事情の報告の中で特筆に値するのは、独立戦争時代に出た、フランス出身の Michel-Guillaume Jean de Crèvecoeur (1735-1813) による *Letters from an American Farmer* (1782) である。ペンシルヴァニアの農夫からイギリスの友人に送る手紙、という体裁のエッセイ集で、J. Hector St. John という英語名が著者名になっている。1764 年にはイギリスに帰化し、長年のアメリカ経験を持つ Crèvecoeur の見聞と農場経営経験が基礎になっており、農耕の苦勞を述べ、南部の奴隷制を弾劾する部分もあるが、大要は、迫害のない、自由で健全な農耕生活を保障する土地としての、アメリカの感傷的なまでの美化である。イギリスのロマン派詩人たちの、アメリカにおける 'pantisocracy' 設立の夢を大いにかき立てた本であった。

*Letters* の基調は、勤勉な自営的農耕生活の礼賛だが、自然への愛、そしてクエーカー教徒への敬愛の念が印象的である。11 章では、クエーカー教徒の植物学者 John Bartram (1699-1777) が敬意をこめて紹介されている。なお John の息子 William Bartram (1739-1823) は、*Travels Through North and South Carolina, Georgia . . .* (1791) でアメリカの自然とインディアンの実態を精妙に記述し、ヨーロッパの文人たちに影響を与えた。インディアンについては、Crèvecoeur は彼らに多くの美質を認めながらも、その狩猟本位の生活には批判的で、また彼らと血縁を結ぶことは「自然の意図」にそむくものとしている。

*Letters* の最終章「辺境人の悩み」は、「この不幸な革命」をのろい、さまざま不安のつきまとう、インディアン世界への逃亡計画を述べて、よき時代への挽歌といった観があるが、Thomas Jefferson (1743-1826) の *Notes on the State of Virginia* (1785) には、新しきアメリカへの希望と抱負が感じられる。駐米フランス公使館書記官がアメリカの各邦に発した質問書に答えたもので、ヴァージニアの自然や社会につき、23 項目にわたってしばしば誇りをこめて解説している。学究肌だったこの政治家の広い学識が遺憾なく発揮された著作であり、信教の自由や農本的共和制の理念、奴隷解放の主張、人種的偏見のないインディアン観など、彼の思想の主要な部分もまたこの本の中にみいだせる。

### 3. 日記・自伝

17 世紀には多数の日記がピューリタンたちによって書かれた。カルヴィニズムを信じる彼らにはつねに自己の検討が必要だったのであり、日記はその手段ともなった。Michael Wigglesworth (1631-1705) や Cotton Mather (1663-

1728) の日記 (それぞれ 1951, 1911-2 公刊) が示すように、厳しい自己省察、罪の告白、黙想というのが、ピューリタン日記のめだつ特徴だった。しかし、同じピューリタン日記でも、Samuel Sewall (1652-1730) のもの (1878-82 公刊) では世俗的関心や欲望が大きく前面に出てきており、世俗化が進みつつあった時代風潮の正直な表現となっている。Sewall は、セイレム魔女裁判 (1692) で判事として死刑を承認したことを、教会で過ちとして公的に告白したことで有名であり、奴隷制反対の主張やインディアンへの友好的な態度でも知られている。

非ピューリタンの日記の代表は、*The Secret Diary of William Byrd of Westover 1709-1712* (1941) およびその続巻として公刊された William Byrd II の日記であろう。これは、イギリスの Samuel Pepys (1633-1703) の日記に似て、原物は一種の暗号文字で書かれ、私生活の内密な部分にしばしば触れる秘密日記である。大農園主、植民地議会議員としての公私の生活や見聞が巨細にわたって記録されている。私的な部分が特に興味深く、朝食前のギリシア語、ラテン語あるいはヘブライ語による読書、祈り、といった日課のほか、夫人との口論と夜の和解、植民地代表としてのロンドン滞在中の漁色等々についての記述が、4,000 冊以上の蔵書を誇った、このヴァージニアきっての教養人の複雑な実態を浮かび上がらせている。

自伝のジャンルでは、Thomas Shepard 牧師 (1605-49) が我が子の教化のために書いた、神の導きを受けた自己の生涯の物語 (*The Autobiography of Thomas Shepard* として 1832 公刊) や Jonathan Edwards (1703-58) の、20 歳の時の回心体験をクライマックスとする青少年時代の魂の遍歴の物語 “Personal Narrative” (執筆 1739 または 1740) が代表的なピューリタン自伝である。

アメリカの自伝作品の中でひとときわ光彩を放つのは、クエーカーの伝道者 John Woolman (1720-72) の *A Journal of . . . John Woolman* (1774) である。はじめに信仰への目覚めを得る前半生が回想され、次いで伝道活動を通じて信仰を深めていく過程が、これは日記体を多用しつつ述べられている。Woolman には奴隷制廃絶を訴える著作や貧者の苦しみを訴える著作があり、また彼はインディアンを同胞視し彼らへの伝道を試みているが、*Journal* は、そうしたすべての弱者に寄せる Woolman の深い人間愛と真摯<sup>(じ)</sup>な信仰実践の精神を伝え、飾り気のない謙虚な表現とあいまって、稀有<sup>(び)</sup>の人格に接する喜びを読者に与える。

Woolman と近い世代の Benjamin Franklin (1706-90) の *Autobiography* (執筆 1771-90) は、信仰の道を示すのではなくて、ピューリタンの生活倫理と現世の知恵を説いている。現世主義のマニフェストともいふべき Franklin のこの自伝と比べて影がうすいが、Thomas Jefferson の自伝、*Autobiography 1743-1790* (執筆 1821) も見落せない。77 才の Jefferson が自分や家族のための覚え書として書いたもので、主体を成すのは、政治家としての公的生活の思い出であり、独立戦争前後のアメリカの政治事情に関する当事者の証言としての価値をもつ。駐仏公使 (1784-89) としてのフランス革命体験を述べるくだりも、この自伝の読みどころである。

自伝の一変種として、Mary Rowlandson (1635?-78?) のインディアン虜囚体験記 *The Sovereignty and Goodness of God . . .* (1682) をあげておきたい。あらゆる苦難を神の答(と)として感謝さえしつつ受けとめる信仰者の心性が注目される作品である。

#### 4. 宗教書・政治文書

これまでみてきた諸著作のうち、いくつかは宗教書の色を帯びるものであったが、以下では宗教的・神学的問題や教会関係を専ら論考するものを宗教書としてとり上げる。

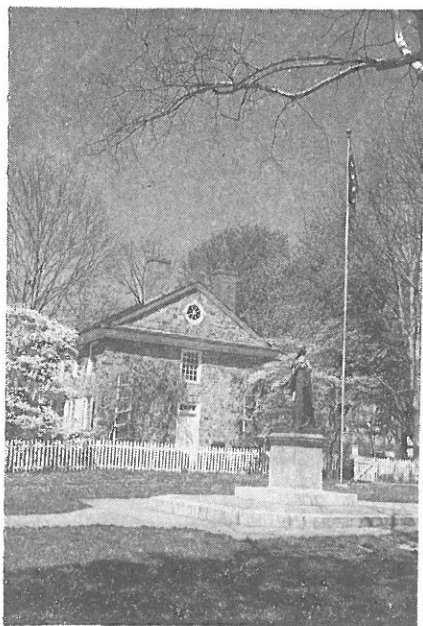
植民地設立後の最初の数十年のニューイングランドでは、宗教面の主役は説教だった。説教の形式は、イギリス本国でピューリタン牧師たちが編みだした独特なもので、「教義」(doctrine)、「論拠」(reasons)、人生への「応用」(uses) という 3 部構成と平明な表現を特徴とした。安息日の礼拝説教のように出席が法で義務づけられた説教もあった。説教は単一の信仰に随順しているはずのニューイングランド社会の制度化された儀式であった。神政政治の衰微ののちも説教の伝統は長く続く。17 世紀の Thomas Hooker (1586-1647)、Thomas Shepard、17-18 世紀の Cotton Mather、18 世紀の Jonathan Edwards が、すぐれた説教者としての名を残している。

説教は印刷されることが多く、この印刷された説教は宗教的文書の一つといえる。それ以外の 17 世紀ニューイングランドの宗教書は、信仰の問題を説教あるいは個人の瞑想に任せかけたかのように、教会の制度や歴史を扱うものが多かった。そしてその多くがイギリス本国の教会関係者への報告として書かれたものであった。いわゆる「マザー王朝」(Mather Dynasty) の初代、Richard

Mather (1596-1669) の *Church-Government and Church-Covenant Discussed* (1643), Thomas Hooker と John Cotton (1584-1652) による *A Survey of the Summe of Church-Discipline* (1648) などが、この種の宗教書である。あるいは、「マザー王朝」二代目の Increase Mather (1639-1723) が父について書いた *The Life and Death of . . . Mr. Richard Mather* (1670) のような教会人伝記もあった。18世紀初頭を飾る大著、「マザー王朝」三代目の Cotton Mather の *Magnalia Christi Americana* (1702) も、結局はニューイングランド教会史であった。Increase Mather は、*An Essay for the Recording of Illustrious Providences* (1684) で神の摂理の存在を立証しようとし、Cotton Mather は、*The Wonders of the Invisible World* (1693) でアメリカにおける悪魔の活動を点検した。説教ではもちろん、Thomas Hooker の説教集 *The Application of Redemption* (1659) にみられるように、多様な神学的問題が論じられている。しかし、18世紀半ばまでのニューイングランドからは重要な神学的著作はあらわれていない、というのが一般の見方である。牧師たちはそろって、カルヴィニストであり、神と人との関係を恩寵とそれに対する義務の関係としてとらえる「契約神学」(covenant theology) の信奉者であったので、本格的な神学的議論の必要がなかったのであろう。Roger Williams と John Cotton の有名な論争も、神学論争というより制度をめぐる論争だった。Williams は信教の自由を主張し、政教一体の神政政治を攻撃したのである。

本格的な神学書は18世紀の半ばに Jonathan Edwards によって書かれた。*Freedom of Will* (1754) の略題で知られる著作がそれである。カルヴィニズムを擁護するこの記念碑的著作は、しかし、時代の趨勢に逆行する抵抗の書でもあった。すでにいわゆる理性の時代であり、ニューイングランドの牧師の中からも、Jonathan Mayhew (1720-66) や Charles Chauncy (1705-87) のように理神論的傾向を示し、正統信仰を離れる者が現われていた。

18世紀後半には理神論の主張があらわになってくる。Ethan Allen (1738-89) の著とされる *Reason the Only Oracle of Man* (1784) は、題名の示すような過激な理神論を説いた。イギリス出身の Thomas Paine (1737-1809) の、真の啓示は自然の中にこそ求め得るとする *The Age of Reason* (1794-5) もアメリカで広く読まれた。Benjamin Franklin の自伝や Thomas Jefferson の書簡から、彼らがかなり徹底した理神論を抱いていたことが分かる。第二代大統領 John Adams (1735-1826) や詩人 Philip Freneau も理神論に共鳴していた。19世紀に入ると、



Washington Headquarter (独立戦争の司令部)

アメリカの理神論は宗教復興運動の高まりの中で後退していき、1820年代には William Ellery Channing (1780-1842) の説教 (1819, 1820) などの影響で、ユニテリアニズムが反正統信仰の主役となっていた。

18 世紀後半は政治文書の時代でもあった。イギリスのアメリカ植民地への課税政策を非難する John Dickinson (1732-1808) の *Letters from a Farmer in Pennsylvania...* (1768) が大きな影響を与えたあと、独立戦争前後には政治論説が多数発表された。政治文書の隆盛は 19 世紀に入っても続くが、19 世紀初頭までの最も重要な政治文書といえ、Jefferson が起草した “Declaration of Independence” (1776) であろう。

人間の自然権、社会契約思想、人民の革命権をうたうこの宣言は、Jefferson の独創というより、啓蒙思潮のアメリカにおける一つの集約とみるべきものである。その他、啓蒙思潮の政治思想を基盤に持つ、Thomas Paine の *Common Sense* (1776) と *The American Crisis* (1776-83), Alexander Hamilton (1757-1804) らの、憲法と連邦制の擁護論および解説を集めた *The Federalist* (1787-8) が、この時期の代表的な政治文書である。

## 5. 主要作家

### (1) Cotton Mather (1663-1728)

主要作品 (宗教書) *The Wonders of the Invisible World* (1693), *Magnalia Christi Americana; or, The Ecclesiastical History of New-England...* (1702), *Bonifacius* (1710, 通称 *Essays to Do Good*), *The Christian Philosopher* (1721), *Manuductio ad Ministerium* (1726)

Cotton Mather は、マサチューセッツ植民地の神政政治社会で勢力のあつ



た「マザー王朝」の三代目にあたる。祖父 Richard は入植後の教会制度確立に中心的な役割を果たし、父 Increase もボストン第二教会牧師であり、ハーヴァード大学学長をつとめた名声高い権力者だった。その上、Cotton Mather の母方の祖父は教会初期の大立物 John Cotton であった。こうした家系への誇りが Mather をつねに鞭撻(むち)することになる。少年時のひどい吃音癖を克服した彼は、1681年、18才でハーヴァードの M. A. の学位を得たのち、説教者の道を歩み、1685年から死を迎えるまでボストン第二教会の牧師をつとめた。Mather は7か国語を修得していたといわれ、また Increase 同様、科学への関心が強く、その方面の著作により 1713年にイギリス王立協会の会員に選ばれている。熱心な医学徒だった彼は、これまた父と同じように、人びとの非難にもめげず天然痘予防接種の奨励に努めた。

Mather の著作物はほぼ 450冊を数える。主要作品としては、そのうちで特によく知られた5作品だけをあげたが、これらによっても一つの転換期を生きた Mather の、守旧と改新という二つの傾向をうかがい知ることができる。

*The Wonders of the Invisible World* の Mather は、悪魔の存在を確信している。インディアンの襲撃をはじめとする、植民地を襲ったさまざまな災厄を、「悪魔の領土」に入植した「神の民」に対する悪魔の怒りの発現とみなし、その最たるものがセイレム魔女騒動であるとして、悪魔論や魔女論を展開しつつ、裁判記録などの要約により事件を再構成している。

Mather の代表作 *Magnalia Christi Americana* (ラテン語で「アメリカにおけるキリストの大いなる御業」の意) は、ニューイングランド植民地の設立、Bradford 伝をはじめとする総督列伝、牧師伝、ハーヴァード大学の沿革、ニューイングランド会衆派教会史、神の摂理の働きを示す出来事、教会の敵との闘いを7部構成で扱う、全巻1,200ページ余の大著である。Mather の意図は標題と副題によっても明らかで、彼は、アメリカにおけるキリストの勝利をうたうこと、そしてニューイングランド植民地史を輝かしい教会史として呈示することを試みたといえよう。社会の宗教的基盤の弱化によって、さらにはマサチューセッツを王領植民地とする新勅許(1691)によって神政政治体制が崩壊しつつあった時、Mather はこのように過去を顕彰することによって、ニューイングランドの本質が「神の民」の国であることを示そうとしたのだ。

Franklin に影響を与えた *Bonifacius* は、教会強化の目的で書かれたもので、諸職種の人びとにキリスト教的愛の実践の規範を示している。*Manuductio ad*

*Ministerium* は、牧師としての心得を説く指導書だが、文体の訓練のために作詩を勧めている点が注目される。Mather の文体自体、多くの場合、飾りの多い、平明ならざるものであった。非常に興味深いのは、*The Christian Philosopher* である。美しく驚異に満ちたこの世界そのものが慈悲深き全能の創造主の存在を示すのであり、人は科学的探究によって世界のその美と驚異を知り得る、という主旨の書で、アメリカにおける理神論の最初の表明であるとされる。

## (2) Jonathan Edwards (1703-58)

主要作品 (宗教書) *A Faithful Narrative of the Surprising Work of God* (1737), *Some Thoughts Concerning the Present Revival of Religion in New-England* (1742), *A Treatise Concerning Religious Affections* (1746), *A Careful and Strict Enquiry into the Modern Prevailing Notions of . . . Freedom of Will* (1754, 通称 *Freedom of Will*), *The Great Christian Doctrine of Original Sin Defended* (1758), *Two Dissertations* (1765)

Jonathan Edwards は、コネティカットの牧師の子として生まれ、17 才でイェール大学を卒業ののち、1726 年からマサチューセッツのノーサンプトンの教会で祖父 Solomon Stoddard 牧師 (1643-1729) を補佐し、祖父の死後は 1750 年まで正牧師をつとめた。1734 年にこのノーサンプトンに始まったとされる「大いなる覚醒」の現象は、ニューイングランドでは特にその後の 15 年間熱狂的な様相を呈することになったが、Edwards は、指導者として、また擁護者として、その中心人物の役割を果たした。この時期の Edwards は、墮獄の恐怖を語って覚醒を迫る “Sinners in the Hands of an Angry God” (1741) のような迫力ある説教によって、大いに名をはせた。

1750 年に Edwards は教会をおわれた。正教会員、回心体験を持たぬ子、つまり「半途教会員」(half-way member) の処遇をめぐる教会員と対立したのである。以後、彼はマサチューセッツの辺境の教会でインディアンへの伝道を行い、この間 *Freedom of Will* ほかに著わした。1758 年 1 月にプリンストン大学の前身であるニュージャージー大学の学長に就任したが、3 月、種痘による感染でこの世を去った。

上にあげた Edwards の主要作品のうち、最初の三つは「大いなる覚醒」にかかわるものである。*A Faithful Narrative* は Edwards 自身の会衆の中に起きた覚醒の様相を記録し、*Some Thoughts* は「大いなる覚醒」を全体的には正し

い信仰運動として擁護している。 *A Treatise* は John Locke (1632-1704) の経験論に依拠する宗教心理学的著作で、宗教は主として「性向」(affections)の問題だとして、宗教を理性の問題と考える Charles Chauncy の「大いなる覚醒」の感情主義的傾向に対する批判にこたえている。

*Freedom of Will* は、18世紀半ばにとみに勢いを増したアルミニウス主義の自由意志説を攻撃する書であり、カルヴィニズム擁護の書である。人間は意志することを行う自由はあるが、何を意志するかは、神の恩寵のみが断ちきり得る因果関係によって決定されている、というのがその主旨で、Locke の経験論や Thomas Hobbes (1588-1679) の決定論的な人間性論がとり込まれ、Edwards の得意とする帰謬(詰り)法的論法が効果的に用いられている。

*Freedom of Will* に次いで、同じく17, 18世紀の諸思想に目配りをきかせつつ、Edwards は *The Great Christian Doctrine* では原罪の教義を擁護し、*Two Dissertations* の第二部、“The Nature of True Virtue” では、神の恩寵なしの善の不可能性を論じて、カルヴィニズムの人間全面墮罪説の正しさを確認している。要するに、*Freedom of Will* をはじめとするこれらの著作は、カルヴィニズムの哲学的再構成であったといえよう。

Edwards の著作は、練れた平明な文体、日常的な比喻、感覚的・情動的な表現を特徴としている。彼には天国を甘美にうたう説教も少なくなく、そうしたものにおいてもこれらの特徴が効を奏している。

### (3) Benjamin Franklin (1706-90)

主要作品 (自伝等) *Poor Richard's Almanack* (1732-57, 1747以降 *Poor Richard Improved*), *The Way to Wealth* (1757), *Autobiography* (執筆 1771-90)

ボストンに生まれた Franklin は、1723年、フィラデルフィアに赴き、やがてこの地で印刷屋として成功した。1731年の頃から公共事業に乗り出し、公共病院、アメリカ哲学協会(1743)、ペンシルヴェニア大学の前身のフィラデルフィア・アカデミー(1751)などの設立に尽力した。1748年に印刷出版業の実務から退いた Franklin は、公共事業のほか、科学研究と政治活動に力を注いでいく。電気に関する研究がヨーロッパで認められ、1756年にはイギリス王立協会の会員に推薦された。政治家としての経歴はとりわけはなばなく、市議員(1748)を振りだしに、独立戦争時には独立宣言起草委員、対イギリス講和会議代表をつとめた。1787年の憲法制定会議では上院・下院の二院制を提

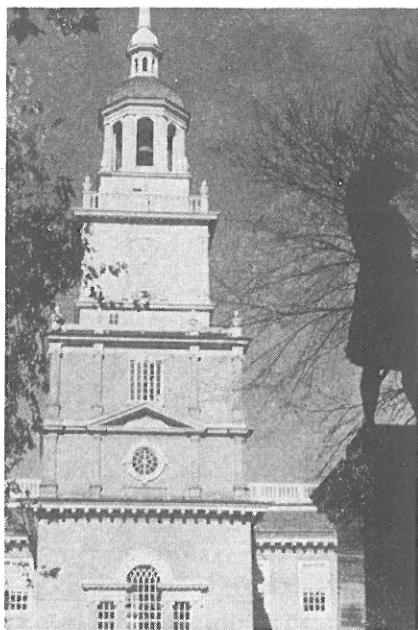
案し、採択を得た。

Franklin は文業の面でもすぐれた業績を残している。学校教育をほとんど受けずに、多方面で成功した彼は、「セルフ・メイド・マン」の典型といえよう。成功の夢が人びとの心を強くとらえていた、南北戦争後から第一次世界大戦前にかけてのアメリカでは、彼の *Autobiography* は最も人気のある本の一つだった。

Franklin の文業は経歴同様、多彩なものである。理論的宗教信条を記した若き日の “Articles of Belief and Acts of Religion” (執筆 1728)、教育振興のためのパンフレット類、奴隷売買やイギリスの植民地政策を攻撃する風刺作品等々、多様な著作がある。彼は「小品」(bagatelle) のジャンルでも、さまざまな随想を遊戯的な趣向で語って人気を博した。諸ジャンルの作品を書くなかで、Franklin は、*Spectator* 紙から学んだという優雅かつ平俗な文体のほか、簡潔平明な文体、皮肉な婉曲(諷刺)的表現を、場合に応じて自在に駆使した。

Franklin の書いたもので最もよく知られているのは、主要作品に掲げた 3 作であろう。そのうちの *Poor Richard's Almanack* は、Richard Saunders という人物に言わせる冗談や警句・格言を売物にした暦で、これらの格言類の中から主に儉約、勤勉、分別の勧めとなるものをあつめ、1758 年度用の *Poor Richard Improved* の序文としてまとめたのが、「植民地が生んだ最も有名な文学作品」とまで言われた *The Way to Wealth* である。

*Autobiography* では、1759 年頃までの Franklin の半生が語られる。初めは子孫たちへの教訓の意味をこめて書きだされたが、1784 年以後は一般読者を対象として書き継がれた。努力→成功のパタンが一貫する、世俗的成功の物語として読める自伝だが、同時にこの自伝で注目されるのは、Franklin が自己



Independence Hall (独立宣言の地)